



## 食と栄養研究の新たな展開に向けて

学長 景山 節

2013年度より「食と栄養研究所」が滝川学園名古屋文理大学および短期大学の附属研究所として発足することとなった。この研究所は2011年の秋の全体会議で滝川嘉彦理事長より構想が出され、準備委員会での検討が続けられてきたものである。本学園のルーツは昭和16年設立の「野原研究所（後の食糧科学研究所）」にある。野原研究所は民間の研究所でありビタミンや栄養強化食品の研究をおこなっていた。本学園はこの研究所の人材を生かして新しい社会を築く若者を教育し育てていくことを目指して創立されたものである。学園の創立からすでに60年を迎えようとしている。現在本学園は「食」「栄養」「情報」を3つの柱として大学と短大部で教育をおこなっている。学園の教員の日々は多忙なものになっている。学生受け入れの入学試験、入学後の教養教育と専門教育、管理栄養士や栄養士など多くの資格取得のための教育、就職支援、などやるべきことは無限と言っているのではないだろうか。

このような状況で研究所設立の意義を考えてみたい。大学の現在の財務状況から、研究所の建物や専属の人員の配置は困難である。研究所の研究員は現教員の兼職ということになる。現在の仕事量にさらに研究がプラスされることになるだろう。このようなことになると、実際に研究時間がないといったことになり、研究所そのものが単に紙上の組織と言った形式的なものになりかねない。まず、実際に研究できるかどうかということで現状の学園を見渡してみよう。研究所の中核となる稲沢地区の健康栄養学科では、他の学科に比べて実験室がいくつかあり、研究設備も比較的整備されている。稼働しているだろうか。現実には少し寂しいものがある。これは研究の物理的な時間がないというよりは、教員の考え方が教育の方向に、すなわち学生を育て卒業させるという方向に向いていることがあげられよう。研究所の設立は、この考え方を広げるよいタイミングと思う。研究所をつくるということで雑然とした研究室や実験室の整備をおこなってきた。実験台や作業台を追加して、研究をしやすい環境をつくりだしてきた。卒業研究も成果を発表することになった。このようなことから研究をするという方向にまず向かうということが重要である。学園のルーツが民間の研究所であったことを考えると、研究をして何か新しいものを創り出すという初心に帰るよい機会である。

成果はどのように出していけばいいだろうか。研究成果を発表する場としては様々なものがある。国際雑誌、和文雑誌、国際学会、国内学会、地区大会など様々である。いずれの場合でも、内容の新規性や面白みなどとともに、その研究が名古屋文理大学、名古屋文理短期大学の教員でおこなわれたものであるということを広く知らせることが必要となる。実際に論文を見るとき、誰が、どこでということがまず知られることになり、内容以上に本人と大学の宣伝効果は大きいものがある。まずはできることからということで、成果を学会に発表することから地道に積み重ねていくことが重要である。

研究内容はどの方向に向かえばいいのか？ 研究所の中心になるのは、健康栄養学科、食物栄養学科である。教員は食と栄養にはすでに関与してき実績がある。研究成果を着実に上げていくには、まず自分の得意分野から取りかかっていくのがよいと思う。その上で、両学科が管理栄養士、栄養士の養成を旨としていることから、病院など医療分野、食育や健康分野、食品関係の分野などの課題を研究の中心にしていく必要がある。医学部など他分野との共同研究、民間との共同研究も必要となってくる。さらに学内にはフードビジネス学科、情報メディア学科もあり、連携した研究も不可欠である。

研究成果をあげて将来の大学院設立の母体とするという構想がある。研究に成果があがると、教育にも相乗効果となって現れてくると思う。研究所設立を一つのステップとして、教員の研究、学生の卒業研究など、学園の研究が大きな流れとなることを期待したい。